

季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM
QUARTERLY

URL <http://www.general-museum.fks.ed.jp>

113

企画展

アイヌの工芸
東北のコレクションを中心に

福島県立博物館



夏の企画展

アイヌの工芸

— 東北のコレクションを中心に —

会期 平成二六年七月一九日(土)～九月一五日(月・祝)



アットウシ 衣服(樹皮繊維) 青森市教育委員会蔵

アイヌの人たちが制作した工芸品は、素朴で機能的なものが多く、自然とも育まれた独自の文化性を持っています。
現在、アイヌの工芸品や民具のコレクションは、北海道のみならず国内外の多くの博物館に収蔵されており、収蔵された経緯も実にさまざまです。
本展覧会では、東北地方で収蔵されているアイヌの工芸品や民具を中心に展示・公開し、収蔵経緯とあわせてご紹介することで、アイヌコレクションが現在まで受け継がれてきた過程にも着目します。
なお今回は、福島県と北海道(蝦夷地)やサハリン(樺太、江戸時代は唐太とも表記)を結ぶ資料も出品します。江戸時代、会津藩が樺太に出兵した時のようすを描いた絵巻。同藩が幕府の方針に沿って蝦夷地を分領支配した際の一コマを描いた屏風。こうした絵画資料の中にはアイヌの人々の描写も見られ、貴重な情報が含まれています。
会期中さまざまなイベントも予定しています。この機会に、ぜひアイヌの文化を身近に感じてください。

○展覧会基礎情報

開館時間／9時30分～17時(16時30分までに入館)

*開幕日(7月19日)に限り、企画展示室への入室は

オープニングセレモニー終了後(10時20分頃)になります

休館日／月曜日(ただし7月21日、8月11日、9月15日は開館)

7月22日(火)

会場／福島県立博物館企画展示室

観覧料／一般・大学生 300(210)円、

高校生 100(80)円、小・中学生 80(50)円

* ()内は20名以上の団体料金

主催／公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

福島県立博物館

後援／国土交通省 北海道教育委員会

公益社団法人北海道アイヌ協会

その他／会期中に一部展示替を行います。

○出品協力

松前町教育委員会、松前城資料館、市立函館博物館、

函館市北方民族資料館、函館市中央図書館、青森市教育委員会、

青森県立郷土館、三戸町立歴史民俗資料館、

東北大学大学院文学研究科 西蔵寺(新潟県新潟市)、

興國寺(福島県伊達市)、会津若松市立会津図書館、初瀬川昂氏

渡部認氏、東京国立博物館



マキリ 小刀 青森市教育委員会蔵



イクスバイ 青森市教育委員会蔵



蝦夷綿 市立函館博物館蔵



標津番屋屏風 新潟市西蔵寺蔵

○関連イベント情報

【オープニングセレモニー】カムイノミ、主催者挨拶

日時／7月19日(土) 9時40分～10時20分(予定)

場所／当館エントランスホールほか

野本久栄さん(祭司)・野本敏江さん(北海道千歳市在住伝承者)

*開幕日(7月19日)に限り、企画展示室への入室はセレモニー終了後
になります

【ギャラリートーク】(二回)

日時／①7月19日(土) 10時30分～11時30分

②9月15日(月・祝) 14時30分～15時30分

場所／当館企画展示室

講師／①小野哲也さん(標津町教育委員会学芸員)、本展企画委員
②当館学芸員

【実演】アットウシ織

日時／7月20日(日) 10時～15時30分

(途中休憩時間をはさみます)

場所／当館企画展示室

講師／二風谷民芸組合

【体験】アイヌ文様を刺繍しよう!《要申込、中学生以上、各回20名》

日時／7月20日(日) [午前の部] 10時～12時

[午後の部] 13時30分～15時30分

場所／当館実習室

講師／二風谷民芸組合

【体験】作って鳴らそう!アイヌの楽器・ムックリ

《要申込、小学生以上、各回二五名》

※小学校3年生以下は要保護者同伴

日時／8月17日(日) [午前の部] 10時30分～12時

[午後の部] 13時30分～15時

場所／当館実習室

講師／二風谷民芸組合

【映像とお話】アイヌとヒグマ《要申込、小学生以上、50名》

日時／9月6日(土) 13時30分～15時30分

場所／当館実習室

講師／田村将人さん(札幌大学特任准教授)、

葛西真輔さん(公益財団法人知床財団保護管理研究係主任)

「写真展 東北―風土・人・くらし」の記念対談が四月十九日に開催されました。本展キュレーター飯沢耕太郎氏、参加作家の田附勝氏をお招きし、赤坂館長が進行を務め、国際交流基金櫻井友行理事には開会にあたってご挨拶をいただきました。

飯沢氏は、写真の歴史が専門で、日本の写真家を紹介できる立場であることと、仙台市出身で震災は他人事ではない、本展キュレーションは引き受けなければならぬ仕事だと思つたと語りました。

震災を契機に計画された本展ですが、震災後の写真は外す。それは別な機会に考える、という結論に至つたそうです。また、東北の地が、どういう歴史、風土で、どういう人が暮らして生活を営んできているか、東北オリジンの形はどういうものかをあらためて考える機会として欲しい。東北について考えると縄文時代が大きな意味を持っていると直感的に考えた、と語られました。続いて、作品映像を見ながら出品作家のご紹介をいただき、対談に移りました。

田附氏は、マイノリティから日本の姿を見つけないと、デコトラを九年撮るうち、東北に関心を深め、ゾワゾワする感覚をたよりに東北に来るようになった。震災のあるなしに関わらず、日本列島の中の東北に力強く生きる存在が残っていることを発表したい。震災後、写真を見てそれが強まるのであればそうあつて欲しい、と東北の写真撮るようになったきっかけを語ってくれました。続いて、縄文文化発見のきっかけを作った岡本太郎のエピソードから、飯沢氏、田附氏、赤坂館長の鼎談に移りました。

赤坂館長は、今の東北の民俗、文化を語るには縄文文化を知らなければどうしようもない、縄文と現代のつながりの一つは死生観、震災後すぐに南三陸の漁村で復活した鹿踊りの供養碑には「生きとし生けるものすべての命のために」と刻まれている、東北には、生と死を巡る思想が濃密にころがっていると、縄文文化と東北の文化を結びつけました。

飯沢氏は、写真と現実のあり方が変わってきているが、写真家はカメラを持った身体であり、写真家は眼で触つ



ている、若い写真家から身体性が希薄になっているが、優れた写真家はそれに気付いている、生と死を経験する身体、それを強く感じられる対象が縄文であると、語りました。

田附氏は、東北が縄文ユートピアと思われることには抵抗がある、いつまで七〇年代の岡本太郎を引く張るのか、東北を縄文のラベルで語らない、岡本太郎も一度捨てよう、と問題を提起されました。

これを受けて飯沢氏からは、縄文を相対化すべき、一般化、普遍化できるのではないか、それぞれの人においての東北、縄文を探さなければつまらない、エッジ、端っこに立つことは、どこでも、誰でもできる、と縄文の概念を拡げる提言がありました。

赤坂館長は、エッジ、縁、にいななければ見えないものがある。ここから見えるものは、ここからの時代の風景なのかもしれない、それは、よじれながら、写真展に多く寄せられた懐かしいという言葉とリンクする、と語り、対話は次第に熱を帯び深まっていきました。

最後に、赤坂館長から「東北写真ミュージアム」の構想が提案され、これに、飯沢氏は、写真家だけのミュージアムにして欲しくない、普通の家にも素晴らしい写真がたくさんある。「東北写真家ミュージアム」ではなく、「東北写真ミュージアム」にしたいとエールをいただきました。





アットウシ (渡部つとむコレクション)

アイヌの暮らしと文化

のように感じるかも知れませんが、例えば「シシヤモ」や「ラッコ」など、実は私たちの身の回りにもアイヌ語の言葉は残されているのです。

Q…昔のアイヌの人たちはどんな服を着て、何を食べて暮らしていたの？

A…アイヌの衣服の代表的なものに、アットウシがあります。これは、北海道や東北北部に自生するオヒヨウという樹木の皮を繊維にして織った伝統的な着物で、刺繍や別の布を張り合わせた切伏(きりふせ)により、独特なアイヌ文様が施されています。オヒヨウの他にも、シナノキの樹皮やイラクサという植物の繊維、さらにはサケ・マスなどの魚皮やアザラシ・ヒグマなどの

Q&A

回答者
内山 大介
民俗担当

Q…「アイヌ」って、どんな人たちなのですか？

A…今年度の夏の企画展では、アイヌの工芸品や民具などの資料から、アイヌ民族の暮らしや伝えられた文化をご紹介します。アイヌという言葉は、アイヌ語で「神(カムイ)」に対する「人間」を意味しています。アイヌの人々は、江戸時代から明治期にかけては北海道をはじめ、樺太島の南部や千島列島、さらに青森県の津軽や下北半島にまで広がり、生活していました。現在では日本語を話し、日本人(和人)と同じ暮らしを送っていますが、かつてはアイヌ語という独自の言葉を話し、文字を持たず、狩猟採集や毛皮の交易などを行いながら暮らしていました。こう書くのと遠い世界

獣皮など、さまざまな材料を衣服に使いました。また儀式などのハレの日には、交易で手に入れた木綿や絹の衣類も着用しました。

また、狩猟民としてのアイヌの人たちは、熊や鮭を捕って食べる印象が強いかもしれませんが、それだけでなく、オットセイなどの海獣猟をしたり、山では山菜も採り、さらにヒエやアワなどの簡単な農業もしていました。肉・魚・山菜や根菜に穀物など、自然の恵みから得られる材料をもとに、それらを煮たり焼いたりして食事をとっていました。

Q…アイヌの代表的な工芸品を教えてください。

A…現在では民芸品・土産品などとして一般に知られ

るアイヌの伝統的な生活用具には、先ほどの衣類の他、さまざまな彫刻が施された道具類があります。例えば代表的な祭祀用具であるイクパスイがそれで、人間の祈りの言葉を神に伝えてくれるとされるヘラ状の祭具です。アイヌの人々は身の回りのあらゆる事物に神の霊が宿ると考えました。よく知られているイオマンテという儀式があります。毛皮や肉をアイヌの世界に届けてくれた熊の霊を送り返すための儀礼で、こういった神霊に祈る儀式の際には必ずこのイクパスイが使われました。祭祀用具としてだけでなく、さまざまな彫刻が施されている工芸的な価値も極めて高いもので、企画展では多くのイクパスイが登場します。

Q…今回の展覧会の見どころはどのですか？

A…展示ではアイヌの人々が伝えてきた日々の暮らしの道具がずらりと並びますので、普段目にすることの少ないそれらの工芸品を、まずはご鑑賞いただきたいと思います。特に生活の中で生み出されたアイヌ工芸に独特の形態や文様に注目して下さい。また最後に、福島県や会津と北海道(蝦夷地)との歴史的な関係の分かる資料もお目見えします。郷土の新しい歴史に触れる機会になるかもしれません。ぜひご期待ください。



煙管と煙草入れ (渡部つとむコレクション)



イクパスイ (渡部つとむコレクション)

樺太到着を伝える陣将・北原采女の書状

阿部 綾子 歴史担当

会津藩の歴史の中で、大変大きな転機となった「戊辰」の年が二回あります。一回は一般に良く知られる慶応四年戊辰戦争の年、そしてもう一回はそれからちょうど六十年前の、文化五年（一八〇八）に行われた、蝦夷地（北海道）・樺太（サハリン）出兵が行われた年です。



十八世紀末より強まったロシアの南下政策に対応するため、幕府は文化四年（一八〇七）に蝦夷地全島を直轄化し、松前藩を現在の福島県伊達市梁川へ移しました（梁川藩）。さらに文化四年から五年にかけて東北諸藩（津軽・南部・秋田・庄内・仙台・会津）を蝦夷地・樺太へ派遣し、ロシアの脅威に備えました。

会津藩の持ち場は蝦夷地の宗谷・松前および樺太（当時は多く「唐太」と表記、ここでは樺太に統一）と決まり、文化五年正月に会津の城下を順々に出発していきまされた。これは会津藩松平家始まって以来の初の本格的な軍事行動で、従者を含め約一、六〇〇人が参加しました。

（ここ）で紹介するのは、会津隊の陣将であり樺太詰

の責任者であった北原采女光裕の書状（個人蔵、福島県立博物館寄託）です。采女は正月十一日に会津を出発し、四月十三日には蝦夷地松前を出帆して、同十九日に樺太南端部の湾の奥に位置するクシユンコタンへ着船しました。書状は、到着翌日の二十日の日付で書かれ、田中三郎兵衛玄宰以下国元の重臣達に宛てて近況を報告しています。中には興味深い内容も含まれているため、全文をご紹介します（「は改行位置を示しています」）。

以手紙致啓達候、先以「殿様益御機嫌能成御座」恐悦之御事ニ候、先便申遣候「通、唐太・蒼野渡海船追々」御雇入ニ相成、丹羽織之丞備「并御普請奉行自在丸、日向」三郎右衛門備正徳丸・永寶丸江「不残乗組、一番組」八天社丸・日「吉丸之」二艘江三ヶ二之御人数「乗組、当十三日昼前松前表」出帆、海上風波穏ニ而聊「無差滞当十九日朝唐太嶋」クシユンコタン江着岸いたし候、「も」と手別手之姿を以乗組候「積」ニ付、北原軍大夫物頭甲士「等乗組候筈之幾吉丸と申」船はいまた着岸不致、且遠「山」三大夫乗組武具方荷物積「込候船茂無之候處、風順次第」二艘ノ茂出帆候様御役向より「御沙汰」ニ付、不得止残り置出「帆致候事に候、将又十四日」二者「山岡傳十郎殿出船」ニ而、同日「二着岸」ニ相成、最上徳内殿「も」右前日シラヌシより当所へ被參「候由、細木等当座」ニ小屋掛之具「設茂有之候」ニ付、順々上陸致「丸小屋茂荒方出来、船中」ハ焚出賄或ハ自分炊き「ニ而」まづ二同雨露飢渴を凌「候事」ニ候、假宮之地ハ去年「中番屋焼払候跡」ニ而、左「右平山之間之平地磯辺」ニ候、薪水之便利よろしく、「尤谷地萱様之物茂在之」ハふき草「ニ相成候、本營之地」所ハ山岡殿「最上殿見分」之上談在之振合「ニ相聞候、是」よりも御軍事奉行并横山「数馬」御普請奉行等差出「見分之上取立」ニ而可在之候、且「又唐太詰御人数ハ当所と」ルウタカ「二ヶ所」ニ可相成哉之「合」相聞候「二付、松前表」ニ而「懸合候処、何れ」ニも「彼地着之上可及談旨被申聞、」着後「いまた治

定茂無之候へ共、「多分ルウタカ江ハ手別致候」振合「ニ可相成哉」ニ候、今日幸「便有之由最上殿被申候由」ニ付、「無滞着之趣而已申遣候、」猶後便委詳申遣「ニ而可有」之候、以上

四月廿日 北原采女

田中三郎兵衛殿
井上兵馬殿
西郷頼母殿
井深宅右衛門殿
諏訪伊助殿

この書状から分かるのは、

- ① 樺太詰の藩士達は松前で便船を待ち、手配が整い次第順々に目的地へ向かった。自在丸以下五艘は四月十三日昼前に松前を出帆、十九日朝にクシユンコタンへ着岸。
 - ② 山岡伝十郎（幕府役人）の乗る船は十四日に松前を出帆したものの到着は同じ十九日であった。
 - ③ 最上徳内は皆の到着の前日（十八日）にシラヌシ（樺太南端部の岬付近）からクシユンコタンへ到着。
 - ④ 細木など当面小屋を建てるのに必要な建材があったため、丸小屋が大体出来て雨露を凌いでいる。その仮営の地はひとまず磯辺の（ロシアによつて）番屋が焼き払われた跡地に建てられた。
 - ⑤ 本営の地は、山岡伝十郎や最上徳内、会津藩の軍事奉行や普請奉行による見聞・相談の上で決定される見込み。
 - ⑥ クシユンコタンの部隊はルウタカ（樺太内の地名）へも分隊になる見込み。
- などの内容です。樺太の地へ一歩踏み入れた藩士達の具体的な行動を今に伝える、貴重な資料です。

テーマ展 相馬家の婚礼道具

—南相馬市同慶寺所蔵の漆工品

会 期：平成26年7月19日(土)～8月24日(日)
 会 場：常設展部門展示室 歴史美術
 観覧料：一般・大学生270円、高校生以下は無料

南相馬市小高区にある同慶寺は、相馬家の菩提寺。境内には相馬藩主や夫人たちの墓が厳かに並んでいます。同慶寺には、相馬藩主・夫人ゆかりの調度品も伝来しており、その中には婚礼道具も含まれていました。東京電力福島第一原子力発電所事故後、一時的に福島県立博物館でお預かりしているそれらを、この度まとめてご紹介いたします。遠くない将来、本来のあるべき所に戻れることを願いながら。(美術担当：小林めぐみ)



鷹の羽紋梅鉢紋散梅竹薔薇蒔絵調度
 南相馬市小高区・同慶寺



八角葵紋九曜紋散薔薇桜蒔絵狭箱
 南相馬市小高区・同慶寺

■会期：平成二六年十一月一日(土)～十二月十四日(日)



「木造十一面観音立像」(重文 勝常寺蔵)

さまざまな苦しみに悩む人々を救うために現れる観音菩薩。観音は人に寄り添う最も身近な仏さまとして、東北地方でも古くから大いに信仰を集めてきました。東北地方の観音信仰は、観音像の優品を生み出すにとどまらず、奉納品や願いを託した品々、巡礼に関わる品々や芸能など、ゆかりの多彩な文化財を各地に数多く残すことになりました。

この展覧会は、東北歴史博物館との共同企画で、東北各地から観音像や観音信仰に関わる品々を集めて展示公開するものです。大きな像から、小さな像まで、さまざまな姿の観音像が並び、また各地の観音巡礼や観音講など人びとが祈りを捧げてきたようすを示す絵馬や奉納品なども展示する予定です。東日本大震災からの復興を祈念して企画された展示を、ぜひご覧ください。(歴史担当 高橋充)

秋の企画展 予告

東日本大震災復興祈念

みちのくの観音さま 人に寄り添うみほとけ

企画展

※企画展料金が必ず必要です

夏の企画展「アイヌの工芸」東北のコレクションを中心にご覧いただけます

会期 7月19日(土)～9月15日(月・祝)

夏の企画展関連行事

※は要申込

「オープンングセレモニー」

日時 7月19日(土) 9時40分～10時20分(予定)

会場 福島県立博物館 エントランスホールほか

「ギャラリートーク」・企画展料金が必ず必要です

日時 7月19日(土) 10時30分～11時30分

会場 福島県立博物館 企画展示室

講師 標津町教育委員会学芸員 小野哲也さんほか

「実演「アイヌのアットウシ織」」

日時 7月20日(日) 10時～15時30分

会場 福島県立博物館 企画展示室

講師 二風谷民芸組合

※「体験「アイヌ文様を利殖しよう」」

日時 7月20日(日)

(午前の部) 10時～12時

(午後の部) 13時30分～15時30分

会場 福島県立博物館 実習室

講師 二風谷民芸組合

※「体験「作って鳴らそう！アイヌの楽器・ムックリ」」

日時 8月17日(日)

(午前の部) 10時30分～12時

(午後の部) 13時30分～15時

会場 福島県立博物館 実習室

講師 二風谷民芸組合

※「映像とお話「アイヌとヒグマ」」

日時 9月6日(土) 13時30分～15時30分

会場 福島県立博物館 実習室

講師 札幌大学特任准教授 田村将人さん

公益財団法人知床財団保護管理研究係主任

葛西真輔さん

「ギャラリートーク」・企画展料金が必ず必要です

日時 9月15日(月・祝) 14時30分～15時30分

会場 福島県立博物館 企画展示室

講師 福島県立博物館学芸員

テーマ展

※常設展料金でご覧いただけます

「ふるさとの考古資料5「富岡町」遺跡探訪」

会期 6月17日(火)～H27年5月10日(日)

「相馬家の婚礼道具」

—南相馬市同慶寺所蔵の漆工品—

会期 7月19日(土)～8月24日(日)

「現代「漆・歴史」考2014」

会期 8月30日(土)～10月5日(日)

ポイント展

※常設展料金でご覧いただけます

「読み解き「戊辰戦記絵巻物」」

会期 4月19日(土)～H27年2月1日(日)

「描かれた養蚕」

会期 7月17日(木)～9月3日(水)

「伝単・連合軍のまいたビラ」

会期 7月18日(金)～8月22日(金)

「博物館の壁が語る日本列島の誕生」

会期 7月19日(土)～8月29日(金)

「ふくしまの火炎型土器」

会期 7月23日(水)～H27年3月15日(日)

「これも弥生土器!?」

会期 7月23日(水)～H27年3月15日(日)

「磐梯山とジオパーク」

会期 8月21日(木)～9月17日(水)

「王様の玉飾り」

会期 9月2日(火)～H27年3月15日(日)

「約束の音色～聖武と嵯峨呂」

会期 9月2日(火)～H27年3月15日(日)

「福島を空から眺めてみよう」

会期 9月13日(土)～11月7日(金)

館長講座

「はじまりの東北学」④

日時 7月17日(木) 13時30分～14時30分

会場 福島県立博物館 講堂

講師 館長 赤坂憲雄

「はじまりの東北学」⑤

日時 8月21日(木) 13時30分～14時30分

会場 福島県立博物館 講堂

講師 館長 赤坂憲雄

「はじまりの東北学」⑥

日時 9月18日(木) 13時30分～14時30分

会場 福島県立博物館 講堂

講師 館長 赤坂憲雄

講演・講座

※は要申込

○考古学講座

「考古学最前線1「みちのくの弥生水田」」

日時 7月12日(土) 13時30分～15時

会場 福島県立博物館 講堂

講師 学芸員 田中敏

「縄文土器をつくろう」

日時 8月2日(土) 10時～16時

日時 8月3日(日) 10時～15時

会場 福島県立博物館 実習室

講師 学芸員 森幸彦

「考古学最前線2「新発見！最北の短甲」

～中島村四穂田古墳～」

日時 9月14日(日) 13時30分～15時

会場 福島県立博物館 講堂

講師 学芸員 高橋満

「土器の野焼き」

日時 9月28日(日) 10時～15時

会場 野外

講師 学芸員 森幸彦

○移動講座

※「化石をさがそう」

日時 9月6日(土) 13時30分～16時30分

会場 伊達市梁川町広瀬川河床

講師 学芸員 竹谷陽二郎

※「化石標本をつくらう」

日時 9月7日(日) 9時30分～11時30分

会場 伊達市梁川中央交流館

講師 学芸員 相田優

○ギャラリートーク

「展示資料から見る古代のふくしま」②

日時 8月16日(土) 13時30分～14時

会場 福島県立博物館 総合展示室「古代」

講師 学芸員 荒木 隆

「展示資料から見る古代のふくしま」③

日時 9月15日(月・祝) 13時30分～14時

会場 福島県立博物館 総合展示室「古代」

講師 学芸員 荒木 隆

ミュージアムイベント

※は要申込

「会津磐梯山・市民盆踊り」

日時 8月15日(金) 19時～20時30分

会場 福島県立博物館 正面玄関前庭

共催 会津磐梯山盆踊り保存会

※「夏休みナイトミュージアム」

日時 8月23日(土) 17時30分～19時

会場 福島県立博物館 常設展示室

講師 学芸員

実演「昔語り」

日時 9月13日(土) 13時30分～15時

会場 福島県立博物館 体験学習室

講師 語り部 横山幸子さん

※要申込の行事は基本的に開催日の1ヶ月前から募集を開始しますが、異なる場合もありますのでお問い合わせください。

※その他、行事等の詳細につきましては、月行事予定やホームページをご覧ください。

7月～9月の休館日

7月7日(月)・14日(月)・22日(火)・28日(月)

8月4日(月)・18日(月)・25日(月)

9月1日(月)・8日(月)・16日(火)・24日(水)・29日(月)